囝一章　　作：顧況

【原文】

囝、哀レ閩也。（囝、音蹇。閩俗、呼レ子為レ囝、父為二郎罷一）

囝生二閩方一　閩吏得レ之
乃絶二其陽一　為レ臧為レ獲
致レ金満レ屋　為レ髡為レ鉗
如レ視二草木一　天道無レ知
我懼二其毒一　神道無レ知
彼受二其福一　郎罷別レ囝
吾悔レ生レ汝　及二汝既生一
人勧レ不レ挙　不レ従二人言一
果獲二是苦一　囝別二郎罷一
心摧血下　隔レ地絶レ天
及レ至二黄泉一　不レ得レ在二郎罷前一

【訓み下し文】

囝、閩を哀しむなり。（囝、音、蹇なり。閩の俗に、子を呼びて囝と為し、父を郎罷と為す）

囝　閩方に生まる　　閩吏　之を得て
乃ち　其の陽を絶つ　　臧と為し　獲と為し

金を致して　屋に満たしむ　　髡を為し　鉗を為し
草木を視るが如し　　天道　知る無く
我れ　其の毒に懼る　　神道　知る無く
彼れ　其の福を受く　　郎罷　囝に別る
吾れ汝を生みしを悔ゆ　　汝の既に生るるに及び
人　挙げざるを勧む　　人の言に従はず
果して　是の苦を獲たり　　囝　郎罷に別る
心摧け　血　下る　　地を隔て　天を絶ち
黄泉に至るに及ぶまで　　郎罷の前に在るを得ざらん

【現代口語訳】

「囝」の詩は、閩の人々のありさまを哀しんだものである。（囝は、発音は蹇。閩の地方の習俗では、子供を囝と呼び、父を郎罷と呼ぶ）

子どもが閩の地方に生まれると、閩の役人はこれをとらえ、なんと、むごくも去勢してしまう。それを自分の下僕とし、金にあかせて、家中に何人も置く。

髪をそり落とし、首かせをはめ、まるで草木を扱うようなむごさ。

「天の神様はご存知ない。ぼくがひどい目に会っているのに。天の神様はご存知ない。あいつが旨い汁を吸っているのに」。

父親は今、我が子と別れる。「わたしはお前を生んだことを悔んでいる。お前が生まれ落ちた時。人さまは、育てるなと言ってくれた。人の言葉を聞かなかったばかりに、やっぱりこんな苦しみを受けたのだ」。

息子は今、その父と別れる。胸ははりさけ、血も流れんばかり。

「遠く天と地を隔てあい。死んだあの世に行くまでは、父さんの顔が見られぬとは」。

【補足】

「上古之什補亡訓伝十三章—上古の什。亡びし『詩経』の篇を補ひ、その訓を伝きしもの。十三章」と総題される十三首の連作。その第十一章である。この点からも判るように、顧況の手になるこの現実批判の作品は、彼にとって、遠く『詩経』の詩精神を承けたものと意識されている。それはまた、彼に先立つ陳子昂や李白・杜甫、あるいは後の白楽天や元稹など、唐代の詩人たちに共通する理念であった。一くちで言えば、それは詩歌の政治的・社会的機能の復活であり、それゆえにまた、詩歌の存在価値そのものを高める理念でもあった。この詩が、四言句を中心とする換韻古体の形式をとっていることは、そうした『詩経』への志向を、韻律の面から支えようとする意図にほかならない。

詩の主題は、一読して明瞭である。一方には、幼いままに去勢され、永遠に父とも別れ住まなければならない貧しい少年がいる。また一方には、人間が人間として生きる尊厳さえ奪い、これを牛馬や草木と同様に扱って怪しまない役人がいる。そうした偏頗で残酷な習慣が公然と行われている現実の中に、作者は、許されがたい政治的な頽廃と、人間的な頽廃を見ている。だがこうした現実は、作者一人の力で改めうるものではない。彼は、深く同情し、哀しんで詩に歌うだけである。しかしそれは、詩として歌いつがれることによって、人々の胸にしみいる静かな力をもっていた。

「閩を哀しむなり—哀閩也 ai Min ye」と、簡潔に記された解題（小序）の中から、読者は詩人の深い憤りの声を聞きとることができるであろう。

【出典】『はじめて読む唐詩5』　松浦友久／田口暢穂・編著　明治書院